

## 特集 実は選ばれています、矢板市

本市では、2016年1月に「矢板市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、人口減少対策を展開してきましたが、今年10月の推計人口\*は、ついに3万人を下回り、29,979人となりました。

全国各地で少子高齢化による人口減少が止まらない現在ですが、本市では、人口減少率のうち、死亡や出生を原因とする自然動態の比率は高くなるものの、転入・転出を原因とする社会動態の比率はここ数年低い数字を維持しています。これは、矢板市への転入者の増加を意味しており、本市が取り組む移住・定住施策が一定の成果を上げていることを示しています。

ここ数年は、さくら市などの近隣市町からの転入が転出を上回っているところもあり、矢板で暮らすことを選択する人が増えています。

\*「推計人口」とは、直近の国勢調査確定人口を基に、その後の人口増減（出生・死亡・転入・転出）を住民基本台帳から得て、毎月1日現在の人口として算出したもの



今号のテーマは移住・定住。本市の取り組みを紹介するとともに、さまざまな想いを胸に本市に移住した市民の方にお話を伺いました。

そこには、私たちが気が付かない矢板の魅力や、これからのまちづくりのヒントがたくさん隠されていました。



Yaita vol.1164 広報やいた 2023年12月号

### CONTENTS 目次

- 2 特集 実は選ばれています、矢板市
- 10 やいたのみなさんコンニチハ・ヤイタゴハン ほか
- 12 子育てひろば・図書館へGO！ ほか
- 14 今月のニュース&トピックス
- 18 はつらつ通信
- 19 市からのお知らせ
- 28 クイズ&アンケート・編集後記

### COVER 表紙の写真

表紙は、取材に応じてくれた田澤さん一家の休日のひとコマ。近所の公園で遊んだり自転車に乗ったり。風が冷たい日でしたが、ママのもとに駆け寄る子どもたちの表情を見て、温かい気持ちになりました。笑い声が絶えないにぎやかな時間となりました。



### POPULATION 人口 (11月1日現在)

30,602人 (△43)	出生 12人
男 15,233人 (△13)	死亡 38人
女 15,369人 (△30)	転入 46人
13,366世帯 (△14)	転出 63人
( )内は10月1日との比較	※住民基本台帳をもとに算出
△は減	



移住びと 01

(左から)金澤 元紀さん・寛子さん

品川区で暮らしていた金澤さんは、温泉付のセカンドハウスを探していましたが、人とのつながりが巡り巡って今の物件に出会い、今年3月に移住しました。「肌に合う温泉に毎日入ることができて、お水や食べ物がおいしくて大満足」と笑顔で話す元紀さんは、空気もおいしくて、運動する機会が増え、健康になったと言います。

「通勤は全く苦にならない」そう話すお二人の職場は元紀さんは東京、寛子さんは横浜と福島です。「品川にいても結局渋滞や混雑で通勤に1時間かかる。同じ1時間なら新幹線の中で有意義に過ごせた方がいい。ここから通えるところはたくさんある」と二人は話します。

金澤さんは移住してから、何度もご近所の友だちとホームパーティーをしたり、行政区のイベントで出店のお手伝いをしたりするなど、地域とのつながりが広がりつつあります。「もっと移住者と地域の方がつながる機会を増やせれば、いろいろな意見が混ざりあい、まちおこしのいい刺激につながるはず」と話す元紀さん。ご自身の経験を活かし、先日、スローワーク矢板で開催されたトークイベントに登壇し、「移住者から見た矢板市の魅力」について語るなど、積極的に矢板市のまちづくりに参画しています。

「矢板市はとてもいいところ。心からそう思えるし、皆さんも誇りを持ってほしい」と話してくれました。

私たちが魅了された矢板市もつと、みんなに知ってほしい

移住びと 02



(後左から)蜷木 理さん・裕子さん  
(前左から)宏子さん・仁雪ちゃん・慈海ちゃん

## 自分たちが輝ける場所、矢板市

2014年に東京から一家で移住した蜷木さんは、館ノ川にある「農林産業研究所」と「矢板温泉 まことの湯」の経営を任されたことがきっかけで矢板市へと移住してきました。移住後の気持ちの変化について尋ねると、「ゆったりとした気持ちで心地良い暮らしができています」と理さんと裕子さんは矢板に来てからの日々を振り返ります。お米や野菜など新鮮でおいしい食材が手軽に手に入り、スーパーや医療機関などの環境にも不便を感じることなく生活ができています。小さいまちだからこそ、人との距離もちょうどよく、自分たちに合った満足いく暮らしができていますと笑顔で話してくれました。

一方、宏子さんは両親とともにまことの湯の経営をしながら、2人の子どもを育てる母。矢板市の子育て環境に「子どもを保育園に通わせるにあたり、待機することもなく、自然豊かな環境でのびのびと成長していく子どもたちを見て幸せ」とその環境に感謝

していると言います。また、宏子さんは「都内に住んでいた時は違い、地域と密に関われる時間が楽しい。私たち家族はた



矢板温泉グランピング「コランビ」

くさんの人に支えられ、やりたいことにチャレンジすることができている」目を輝かせながら話す姿からは矢板での充実した生活が感じ取れます。そして「自分が輝けるまちが矢板市」と笑顔で話してくれました。

スポーツツーリズムに力を入れてきたまことの湯は、多くの合宿を受け入れながら、昨年度にカフェ、今年度は露天温泉付きグランピング施設をオープンさせるなど、進化を続け、交流人口の増加に貢献してきました。蜷木家が矢板市に移住して間もなく10年。自分たちが感じてきた矢板の良さをヒントに、その魅力を伝える側として、これからも矢板市のPRに力を注ぎます。

### SLOW TALK YAITA スロートーク矢板

東京大学、三菱地所(株)らが理事を務めるエコツェリア協会と、都内企業であるエフエムスタッフがコラボレーションし、さまざまなテーマでゲストスピーカーを招き、矢板のまちづくりに関する意見交換するトークイベント。人と人をつなぎ、地元の方と共に矢板の活性化に向けて、活動を加速しています。

#### 次回開催日程・ゲスト

第6回 12月15日(金) Glide Path(株) 代表取締役 向井 裕人氏  
第7回 1月19日(金) 矢板市長 齋藤淳一郎氏



スローワーク矢板

地域共創型シェアオフィス。矢板ならではの魅力的な働き方(スローワーク)を提供しています。



(一財)農林産業研究所  
主任研究員 蜷木 理さん

1980年 農林水産省 入省  
2005年 東京農工大学教授 就任  
2014年 同大学名誉教授 就任  
2014年 農林産業研究所研究員 就任

### ナルコユリで矢板市の農業を元気に

伝統農産物の研究を専門としてきた経験を活かし、少子高齢化が進む矢板市の農業事情の一助になればと、いろいろな作物の研究に励んできました。移住当初は、敷地内の土壌を活かし数種類のハーブと杜仲を植栽し、杜仲茶とハーブティ3種をやいたブランドに登録し商品化しました。2017年からは、国内栽培されていない「ナルコユリ」の栽培研究に着手し、やっと「ナルコユリ茶」や「ナルコユリ餃子」などの商品化が本格的に動き出してきました。矢板市には思った以上に豊かな自然があります。都会からの関心が得られるような新たな農業の展開を目指して、もう少し研究者としてがんばってみようと思います。



(左から)田中 麻里さん・天ちゃん・直人さん

## 地域のふれあいを楽しみ、自分たちらしく暮らす

「自然の中でのびのびと子育てができていて、東京にいたときに比べて、時間の流れが穏やかになった」そう話すのは北海道出身の直人さんです。東京で出会い結婚した二人は、3年前、コロナ禍を機に麻里さんの地元である矢板市への移住を決めました。東京でWEB デザインなどの仕事を手がけていた直人さんは、今はフリーランスに転向し、自宅やふるさと支援センター TAKIBI を職場として活用しながら、月に数回東京へ出向くと言います。「都会とのつながりを持ちながら、田舎暮らしを楽しむのに、矢板市はちょうどよい」と話します。

麻里さんは「矢板市は産前から産後までサポートが充実していて、間違いなく東京より子育てがしやすい。初産婦の私には特に産後ケア事業がためになった。いろいろな事業をもっと活用したい」と市の手厚い子育て事業に助けられたと言います。そして「何よりも人があったかい」と二人は口をそろえます。赤ちゃんを連れて出かけると、みんなが話しかけてくれて、「うちの孫も見てー」と写真を見せてもらったこともあるとか。近所のスーパーのおばちゃんも話しかけてくれて、「こうやってうちの子の成長と一緒に見守ってくれるんだなあと思うと、地域のあったかさにほっこりする」と笑顔を見せます。「自分たちも地域のためにできることがあれば」と、片岡駅前イルミネーションを主催する KATAOKA BASE に参加。自分たちらしく地域とつながり、暮らしています。

ちいこ  
よろこ  
うんは  
どな  
いこ  
いと  
便利  
な  
田舎  
が



(後左から)田澤 和歩くん・舞さん

(前左から)由菜ちゃん・成さん

「矢板市を選んだ大きな理由は、交通の便がいいから」そう話す田澤さん一家は、マイホームを購入するタイミングでさくら市から矢板市へ移住しました。駅もインターも近いし、保育園やドラッグストアも身近にそろっていてコンパクトで住みやすいと言います。成さんは、宇都宮の実家に行くときはもちろん、毎朝の通勤も那須塩原市まで高速道路を利用しています。「朝の時間帯は渋滞がひどいので、高速道路が使えて助かっている」と話します。

「親世代が働きやすいまち」と話すのはフリーカメラ

マンとして働く舞さん。保育園は待機児童もなく利用できるのはもちろん、わが家が利用している保育園では19時まで預かってもらえるので助かる」と話します。他の市町では、待機児童が多く、預け先の保育園が見つからないため職場に復帰ができなかったり、下の子が生まれたら、上の子は一度保育園を退園し家で面倒を見なければならなかったりすると言います。「コロナ禍も明け、育成会が再開したら、さらににぎやかになりそう」と話す成さんと舞さん。同世代が増えてきたというご近所とのつながりを楽しみながら、暮らしています。

### 矢板市の子育て支援を紹介します

他にもサポートがたくさんあります。詳しい内容はこちらからご覧ください。



#### 01 | 子育て支援医療費助成事業

こどもと妊産婦が医療機関などを受診した際の保険診療分を助成しています。(妊産婦は一部自己負担があります。)

#### 02 | マタニティエクササイズ教室

妊娠中でも安心して楽しめる運動教室。出産・産後に必要な筋肉を鍛えながら、妊娠中の生活や出産・育児に向けた相談もできます。

#### 03 | 産後ケア事業

体の回復に心配があったり、慣れない育児生活に不安があったりする場合、赤ちゃんと一緒に宿泊または日帰りで医療機関を利用し、相談やリフレッシュができます。

### 矢板市の移住支援を紹介します

他にも暮らしを支える手厚い支援があります。詳しい内容はこちらからご覧ください。



#### 01 | 移住支援金

東京圏から矢板市に移住した方に、支援金を支給しています。4月より一人100万円の子ども加算を追加しています。

#### 02 | 暮らしのびのび定住促進補助金

市内に住宅を取得(新築・建売住宅購入・中古住宅購入)し、そこに住民登録をした方へ、条件に合った補助金を支給しています。

#### 03 | 空家等活用支援補助金

矢板市空き家バンク制度を利用して購入した空き家で、改修工事などを実施する方に対し補助金を交付しています。

# 人と人のつながりを まちの力に



(左から)杉山 やすえさん・久山 節子さん

矢板ふるさと支援センター TAKIBI を拠点に活動する杉山さんと久山さんは、移住希望者に対し、要件に合う市内の移住場所をコーディネートする集落支援員です。「窓から高原山が見える場所に住みたい」「温泉がある物件がいい」など、移住者の希望はさまざま。子どもがいる相談者と一緒に長峰公園で遊んだり、「行政区のお付き合いに不安がある」という相談では、区長さんへ連絡を取り、相談者と一緒にお話を伺いに行ったこともあると言います。「こんなに親切に対応してくれた市は初めて」と驚かれたこともあるそうです。

「私たちはできることをしているだけ。でも人柄の良さは矢板のいいところの1つ。矢板にはあったかい人が多い」と二人は言います。

矢板市への移住者を増やすことはもちろんですが、それはゴールではなくスタート。移住者ならではの考えや発想をヒントに、矢板市の魅力を市民の方にも再発見してもらえる活動につなげたいと言います。

最近では、地元の方と移住者で、イベントを開催したり、新しい仕組みづくりをしたり、そこに市内に通う高校生が加わったり、TAKIBI を通じて、また集落支援員を通じて、新たな人のつながりが矢板の魅力を生み出しています。

人と人をつなぎ、やりたいことを形にしてくれる場所「TAKIBI」。集落支援員の二人は、ここに集まった移住者や地元の方をつなぎ、共に未来を語り、みんなの心に火を灯しています。



▲人のつながりが広まり TAKIBI フリースペースに集う地域の方たち  
◀ 10月に東京で開催された移住フェアで矢板市のPRをする二人

## 矢板ふるさと支援センター TAKIBI

TAKIBI は、移住者への相談・支援活動や空き家活用の相談、シェアキッチンや貸出、テレワーカーや地域の中高校生へ仕事や勉強の場を無料で提供(Wi-Fi、電源、モニター貸出)するなど、さまざまな機能を備えた交流の拠点です。

「焚き火に自然と人が集まり、語り合うように、まちづくりに関わる人がここに集まり、そのチャレンジを支援していく場所でありたい——」『矢板ふるさと支援センターTAKIBI』という名前には、そんな意味が込められています。



問い合わせ/  
矢板ふるさと支援センター TAKIBI  
☎ (47) 7017



「矢板にはなんにもない」  
そういった声を耳にすることがあります。  
でもそれは、視点を変えれば、都会でもなく田舎でもないちょうどいいまちということ。  
高原山の裾野に広がる矢板市は、生活に必要なものは一通りそろいつつ、まちなかの川に蜚がいたり、川遊びができたりと、「過不足のない田舎」。  
東京や東北へのアクセスも良く、イイとこ取りの田舎暮らしが可能なまち。  
それが矢板市が選ばれている理由なのかもしれません。

移住者の方たちが口をそろえて言っていた言葉  
「自然が豊かで、交通の便が良く、人柄があたたかいまち」

私たちが当たり前だと思っていた日常に魅力を感じ移住してくれた皆さん。  
まちづくりの改善点や課題を教えてくれる皆さん。  
人口減少が進む今、若い世代がずっと住みたいと思えるまちにすることが、将来にわたり選ばれるまちの重要な要素です。  
そんな方がさらに増えるよう、また、移住後の暮らしを不安にさせないため、出会い・結婚・住まい・出産・育児・教育など、あらゆる分野の施策を連携し、手厚いサポートを行っていきます。

『ここに暮らしてよかった』誰もがそう思える  
矢板市はそんなまちになることを目指します。

